

四百文字小説・唐変木な小父さん

小倉 一純

三軒先の町内会館で、夏祭りの打ち合わせがある。

サンダルを履いて出かけてみると、入口には人だかりができていた。若夫婦が生まれたばかりの赤ん坊を抱いて来ているのである。

「かわいいわあ。コンニチワ、太郎ちゃん」

「バブバブツ」

「おじいさん。ほら、田中さんちの太郎ちゃんよ」

「ほうほう、かわいいのう」

そんな様子を見て、私も一団に加わった。

「おお、ほんとうにかわいいですなあ」

私は小百合の顔を見て思わずこんな言葉を発していた。

「その小父さん、褒める相手、間違ってるんじゃないねえの。唐変木とうへんぼくだなあッ」

ふと見ると小百合の舅しゅうと、啓介が私の後ろに立ってぶつくさいっている。

田中啓介は、私の幼馴染である。

了